

## “真剣勝負”～囲碁と将棋～

十勝医師会  
耳鼻咽喉科おとふけクリニック

中川 雅文

去年より、将棋の藤井聡太棋士の登場で、思いがけない「将棋ブーム」が起きている。また、囲碁界も「井山裕太棋士の全タイトル制覇」が2回もなされ、脚光を浴びてきた。さらに将棋の羽生善治と囲碁の井山裕太両名に国民栄誉賞も授与され、一層注目を集めるに至った。自分自身はスポーツの真剣勝負を見る感覚で、将棋と囲碁との盤上の戦いを中学生頃より観戦している。その真剣勝負が面白いからである。今までに見たり、読んだりした思い出の対局で特に印象に深い対局を振り返ってみた。

### ～将棋～ 谷川浩司名人対田中寅彦戦 (1983年全日本プロトーナメント)

1983年、谷川浩司が21歳で名人位に就いた。それまで、中原誠、加藤一二三、米長邦雄さらには大山康晴なども健在であり、頭一つ抜き出ていた中原名人を加藤一二三が壮絶な戦いで名人位を奪取し、やっと中原の牙城が崩れた！と思いきや、わずか一年で21歳の谷川浩司が名人位を加藤から奪い、将棋界の頂点に立ってしまった。谷川は、「名人位を1年だけ預らせてもらいます」と殊勝な言葉を述べ、周りから称えられた。しかし、田中寅彦という棋士は、名人位になったばかりの谷川との対局に勝利し、「あのくらい！？で名人になる男がいる」と述べた。しかし、これには、温厚な谷川名人も「カチン！」と来たらしい。果たして、2人は時を置かず、「全日本プロ選手権決勝三番勝負」でまた相見えた。結果は1勝1敗の後の三局目を谷川が制し、田中の「挑発」を谷川が実力で退けた。当時将棋界としては、試合前の田中の「挑発発言」もあったためか、ファンだけでなく、珍しく多数のマスコミも集まり取材に来ていたのだ。私がこの対局を知ったのが将棋とはほぼ関係ない「FOCUS(現在は廃刊)」という雑誌の記事で「対局終了後の茫然自失の田中棋士と感想戦で喜びを抑えているかのように見える谷川名人の写真」で、この1枚でこの1局の将棋のすさまじさが伺えるような写真であった。実際の棋譜を見たのはずっと後のことである。

### ～囲碁～ 藤沢秀行棋聖対加藤正夫本因坊 (1977年第2期棋聖戦第5局)

この対局も伏線がある。初代棋聖位の藤沢秀行の壮絶な1局である。棋聖位は今も囲碁界ナンバー1の棋戦である。その初代棋聖位を藤沢秀行が勝ち取

り、その祝賀会で、加藤本因坊がお祝いついでに「次に僕と勝負したら、僕が勝てると思います」とわざわざ言いに来たという。当時、藤沢は50歳くらい、加藤は30歳くらいのはずで、適当にあしらえばよいものを、藤沢は「それじゃ、来年挑戦者になってかかって来い！そこで、こっぴみじんにしてやる！」と切り返したらしい。果たして、加藤は「約束」通り、強豪をなぎ倒して、挑戦者として出てきてしまった。藤沢も加藤も、自分の吐いた言葉のためにもお互い負けるわけにはいかない勝負をすることになった。当時の加藤は本因坊・十段・碁聖のタイトルを所持し、直近の成績も昇り調子で、下馬評は加藤が圧倒的に有利であった。下馬評有利は、加藤の好調さだけではない。藤沢は、「己との戦い」すなわち「アルコール中毒」との戦いもあったのである。対局の日程が決まれば、まず「断酒」から始め、「禁断症状」が落ちついてから対局に挑むのである。最初に4勝した方が勝者になる七番勝負で、予想通り、藤沢はあつという間に1勝3敗に追い込まれ、運命の第5局を迎える。この対局で加藤は序盤から藤沢の絶対的陣地に打ち込みを開始する。この手から陣地取りの囲碁が急に大激戦に変わっていく。お互いに石を包囲・分断し、取られた方が負けという状況になってしまった。緊迫する戦線で、藤沢は3時間弱の大長考の末に放った1手で、加藤の石を取り切り、131手で1勝を返した。その後、藤沢は残りの2局もきわどく勝ち、4勝3敗で防衛に成功した。この対局は後日「流れを変えた大虐殺」という名で紹介されている。負けた加藤は、当初の予定を変更して、空路から列車で帰路に着いた。担当記者が一人同行した。加藤は黙って車中ずっと敗因を検討していたという。結論は「気合と執念の差だった。負ければ野垂れ死にするといい聞かせて戦った藤沢秀行の迫力に遠く及ばなかった」と述べたそうである。最後までドラマチックな戦いであった。

今では、将棋や囲碁でも人工知能(AI)が、名だたる棋士を打ち負かすようになってきた。しかし、意地をかけた人間と人間の戦いのドラマには及ばないと思っている。勝負に勝つだけでは、人々の記憶や後世の語り草にはならないのである。これから、藤井聡太棋士らがトップ棋士に相見え、われわれの記憶に残る名勝負を展開するのを楽しみにしている。